

我が霞ヶ浦

加藤尚文

僕が霞ヶ浦の近くの阿見にいたのが、昭和十九年九月から、翌二十年の五月まで、わずか八ヶ月間。オン年十九歳。正式の名は、土浦航空隊第十五期予備学生。つまり学徒出陣というやつ。大学生のまま土浦海軍航空隊へ入隊したわけだ。

あんまり大昔のことで、みんな忘れてしまったが、母が小学校一年生の弟を連れて、大荷物をかかえて、土浦の駅から阿見までテクテク歩いて面会に来てくれたのを覚えてる。今考えるとずいぶん長い距離みたいだが、みんな、そんなことを平気でやる時代だったのだなあと思うのである。

土浦市内の片岡さんという家がクラブみたいになっていて、何回か世話になったが、僕は町にはほとんど出ないから、町の中を歩きまわったなどということもなかった。

ぢや何をやってたのかというと、朝から晩まで基礎訓練というヤツで、冬の朝なんか、四時か五時頃起こさ

れて、カッター訓練。きびしい!!の一語だね。カッターが凍りついていて動かさないものだから、その氷を自分の体温で溶かして動かした……なんてこともあった。

そんなわけで、水を見たり、景色を眺めたり、そんな気持ちの余裕が一つもなかった。今、考えると、ちょっと不思議な気もするけれど、あんなに霞ヶ浦の近くにいて、毎日のようにカッター訓練をやらされて、霞ヶ浦にカッターをこぎ出して、沖まで出たりのだけけれど、その景色も、水の色もちっとも思い出せなくて、シモヤケになって、それがくずれて血だらけになった手……。

今でも、土浦と聞くと、筑波おろしが吹いて寒い所という印象だけ。

青年たちが、あんな思いをして過す時代というのも、もう二度とあり得ないと思うけれど、僕にとって、霞ヶ浦というのは、その二度とありえない時代とつながっているんだ。

(評論家)

◇土浦市立図書館友の会の会員を募集しています。く

わしくはTEL210147奥井まで